タイトル：私と障がいのある人たち
学校名・学年：関西創価高等学校３年
名前：大塚　礼子

（本文）
　私は小学一年生の頃からスケートボードを続けている。私にとってスケートボードは、ただ技を練習するだけのものではない。多くの人との出会いと、同じ時間を楽しむことができる大切な場所でもある。中学一年生のとき、私はスケートボードを通して、耳の聞こえない方と一緒に滑る機会があった。この経験は、私が障がいのある方との関わり方について考え、自分の中にあった壁に気づくきっかけとなった。
　私が小学三年生から六年生の頃、耳の聞こえない方々が一定期間、学校に来て私たちと一緒に過ごすことがあった。当時の私は、障がいについて詳しく知っていたわけではなかった。そのため、相手が耳の聞こえない方だからといって、特別に意識することもあまりなかったと思う。私にとっては、同じ学校で過ごす人であり、一緒に関わる人だった。障がいがあるから嫌だと思うこともなく、自然に過ごしていた。
　しかし、中学生になり、障がいについて学び、少しずつ知識を得る中で、私は以前とは違う気持ちを持つようになっていた。（どうやって関わればいいのだろう）（失礼なことをしてしまわないだろうか）と考えるようになったのだ。
　小学生の頃は何も気にせず関わっていたのに、障がいについて知った中学生の私は、逆に自分の中に少し壁を作ってしまっていたのだと思う。私にとって普通のことが、相手にも同じように伝わるとは限らない。普段なら声で話せば伝わることも、同じ方法では伝わらない。その違いを意識しすぎて、以前のように自然に関わることが難しくなっていたのかもしれない。
　そんな私の考えを変えてくれたのが、中学一年生のときのスケートボードでの経験だった。
　最初は、やはりコミュニケーションを取ることが難しいと感じた。何かを伝えたいと思っても、普段のように声だけで伝えることはできない。しかし、一緒に過ごしているうちに、少しずついろいろな方法で気持ちを伝えあえるようになった。口の動きを使って伝わることもあり、手話を教えてもらうこともあった。
　手話を教えてもらったとき、私はとても素敵だと感じた。新しい知識を得ることができたというだけではない。手話を覚えることで、この世のより多くの人と関わることができるようになるのではないかと思ったからだ。今まで自分が知らなかった方法を知ることで、人とのつながりを広げることができる。私はそのとき、手話は言葉を伝えるためだけのものではなく、人と人をつなぐ大切なものだと感じた。
　そして、スケートボードそのものも、私たちのコミュニケーションになった。お互いに練習している技があり、何度も失敗しながら挑戦する。なかなか成功しないこともある。それ

でも諦めずに頑張り、相手が練習していた技に成功したときには一緒に喜んだ。私がずっと練習していた技に成功したときも、一緒に喜んでくれた。そのとき、言葉がなくても、相手が喜んでいることや応援してくれていることが分かった。

技を教えるときにも、言葉だけに頼る必要はなかった。実際にスケートボードを手に持ち、「このように動かす」と動作で見せることで伝えることができた。自分がやって見せて、相手の動きを見る。相手がやって見せて、自分も挑戦する。そのようにして、一緒にスケートボードをすること自体が、私たちにとって一つのコミュニケーションになっていた。

私はその経験を通して、「障がいがある」「障がいがない」という違いよりも、同じ楽しみ、同じ時間を過ごすことの方が大切なのだと感じた。コミュニケーションの方法は違っても、一緒に笑ったり、成功を喜んだり、何かに挑戦する時間は、他の友だちと過ごす時間と何も変わらなかった。「障がいのある人」という特別な存在ではなく、同じように笑い、楽しみ、悔しがり、挑戦する一人の人であり、私にとっては一緒にスケートボードを楽しむ友達だ。

障がいについて知ることは、もちろん、とても大切だと思う。相手が困っていることや必要としていることを知るためには、正しい知識や理解が必要だからだ。しかし、知識を持つことと、相手を特別な存在として遠ざけることは違う。大切なのは、障がいについて知った上で、「障がいがあるから」と決めつけるのではなく、一人の人として相手と向き合うことなのではないかと私は思う。

これからも私は、相手の違いを理由に壁をつくるのではなく、その違いを知り、理解しながら関わっていきたい。そして、スケートボードが私と友達をつないでくれたように、私自身も多くの人との出会いやふれあいを大切にしながら、少しずつ心の輪を広げていきたい。